心理・社会的発達と化粧行為の関連の検討

—自己項目生成型 QoL 評価法を用いた老年期の化粧行為に関するインタビュー調査から

○木戸彩恵

(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構)

キーワード：化粧行為・心理・社会的発達・老年期

Examination of the Socio-Cultural Development and Cosmetic Behavior:

Interview Research on Cosmetic Behavior of old age with the Schedule for the evaluation of Individual Quality of Life.

Ayae KIDO

(¹Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan Univ., ²RIKEN)

Key Words: Cosmetic Behavior・Socio-Cultural Development・Old Age

目 的

研究背景や研究目的を記入してください。行数は適宜ご調節ください。近年、化粧行為の対象は幼児から高齢者まで幅広い年齢に拡大する傾向にある。特に高齢者の化粧については QoL (生活の質) の向上など、一定の成果を挙げており、多くのボランティア等がその活動を支えている。そうした活動の中では、「美しさ」や「抗齢 (アンチエイジング)」など、実年齢よりも見た目を若く操作することが迫られている。化粧に関する心理学的研究は主に社会心理学分野において進められてきた。そのため、個人の年齢やコホートに特有の化粧の意識や行為が変容していくという発達心理学的な知見はまだ十分に積み上げられてはいない。現時点では、年齢段階が上がるに伴って自己呈示手段としての化粧の意識が段階的に変化していくことが研究されている (阿部, 2001 など) にすぎず、化粧の役割の変化の「質」について議論がなされていない。

一方で、エイジング概念の普及や高齢者の化粧は確実に普及している。特に実践的な心理支援やマーケティングの観点からこの分野に多くの介入がなされている。そうした研究においては、魅力の低下や美容・装いに関する関心の低下が単純に問題であるとされ、「ステキ」に元気になることを目指した介入が行われている。こうした事実に基づく、生涯発達と化粧の関係性を質的に問うことの重要性は確実に増しているといえるだろう。発達と化粧行為の連関を巡る問題は基礎的な課題であるにも関わらず、化粧研究が未だ解決できていない課題なのである。それは、発達の捉えた場合に、より個性性という観点が強くなると考えられるからである。

生涯発達心理学の第一人者であるエリクソンは、老年期の発達における課題を自我の統合としており、高齢期には人生のあらゆる心理社会的要素を体制化していくことが課題になり、自己の内的な特性と向き合うことが求められるようになることと述べている。つまり、単に多くの人から若々しく見えることを目指す現在の老年期の化粧の理解そのものが当事者にとってはフィットしない可能性を示唆しているといえる。ただし、ある人がある環境で行為をする場合、個人の行為の選択は社会制度や社会環境に存在する多くの記号 (sign) から明示的・暗示的に社会的に導かれる。主体として個人が環境に接するときには、そこに行為を導く誰か (もしくは何か) が存在する。そして、社会的に導かれた行為を行う結果として個人の精神過程に変容が起こると考えられる。時間の経過と共に宛先 (となる他者や環境システム) との関係が変容していくこと、発達に伴い自分自身の身体性とそれを表現する仕方が変容することを考慮に入ると、化粧と生涯発達の関係を検討することから生のアクチュアリティが見えてくるだろう。

老年期の女性にとっての化粧はどういった意味をもつのだろうか? アンチエイジングという非現実的なゴールは老年期を生きる当事者の目にどのように映るのだろうか? 老年期の女性は、誰の何のために化粧をするのだろうか? 本研究では老年期の化粧意識の理解を深めることを目的とする。より具体的には、自発的に化粧をする老年期女性にとって化粧行為がいかなる意味をもつかを明らかにする。

方 法

調査協力者：質的な QoL 測定法である SEIQoL (The Schedule for the evaluation of Individual Quality of Life: 個人の生活の質評価法) を用いて、老年期の化粧の意味を探索する。調査の対象は、日常的に化粧 行為をおこなう老年期女性 20 名とする。

調査方法：SEIQoL は、回答者主体の QoL 評価法であり、回答者自身に QoL の評価基準を委ねる形式をとっている。具体的には、QoL 評価プロセスに半構造化インタビューを内包し、回答者が自ら QoL に関連する領域 (Cue) を語る行為を伴う。その上で、回答者の列挙した領域 (Cue) を基にそれらの充足度と満足度を評価する。これらのプロセスを伴うため、SEIQoL は自己項目生成型の QoL 評価法とも呼ばれている (サトウ, 2010)。回答者が QoL を語ることで、回答者の価値観や「いま-ここ」で体験される患者のライフを QoL 評価に直接的に反映することができるのである。ここから、質的に老年期の化粧意識の構造と、その構造を下支えする認識を明らかにする。

展 望

インタビューによる調査研究から、化粧をしている時の方が、化粧をしていない時に比して自己の定義がより社会的に明確化されること、化粧が老年期の QoL 向上に寄与する可能性があることが明らかになりつつある。

美容やファッションおしやれの分野では、60 歳前後の年代以降に向けた商品・情報・サービスが少ないことが現状である。今後は、本研究を通じて、個人の人生や精神性を反映するオーダーメイドの化粧という新たな可能性を開いていきたい。

引 用 文 献

阿部 (2001) ストレスと化粧の社会生心理学. 東京: フレグランスジャーナル社.
サトウタツヤ (2012) QoL, 再考 (死よりも悪い QoL 値を補助線として), 生存学, 2, 171-191. 生活書院.